

森里海連環学に基づく東北復興のための
第6回京都大学学生ボランティア事業報告書

(平成26年3月17日～22日)

京 都 大 学

目 次

1. 第6回学生ボランティアの派遣について
2. 参加者
3. ボランティア活動内容
4. 参加学生による活動報告
 - (1)はじめに
 - (2)労働ボランティア各担当からの報告(活動内容報告・課題反省など)
 - (2-1)教育支援 担当
 - (2-2)カモメネット(農園栽培支援) 担当
 - (2-3)陸前高田市役所訪問 担当
 - (2-4)馬場国昭さん講演 担当
 - (2-5)加藤拓馬さん講演 担当
 - (2-6)水山養殖場(ホタテの養殖作業)担当
 - (2-7)リアスアーク美術館 訪問記録
 - (3)おわりに
5. 今後のボランティア活動に関する課題、留意点(フィールド研)
6. 記録
 - (1)記録写真
 - (2)第6回学生ボランティア派遣の応募チラシ
 - (3)事後報告会の告知について
7. 特記事項(放射能測定の結果など)
8. 謝辞

1. 第6回学生ボランティアの派遣について

京都大学は、平成26年3月17日から3月22日の間、ホームページで公募した学生25名と教員1名、事務職員1名、技術職員1名、技術補佐員1名を宮城県気仙沼市の宮城県気仙沼高校および同市西舞根地区の水山養殖場、岩手県陸前高田市に派遣し、東北復興支援ボランティアを展開した。

ボランティア参加学生募集は、平成26年1月7日から14日にかけて、各学部・大学院の教務課を通じて、申込書を提出する形式で行われた。今回は幸いなことに、募集人数と申込み数が一致したため、選抜を行うことなく全員が参加することができた。

募集に先立つ平成25年12月17日に第5回学生ボランティア参加者有志によるボランティア事前説明会が開催された。第5回に派遣された学生の一部が気仙沼高校との交流会を学生独自で企画し、前もって高校との情報交換を行っており、その経験談が伝えられた他、第6回への継続企画が提案され、これに対する積極的な協力が第6回参加学生に要請された。

被災地では、足並みがそろっているわけではないが、復興の兆しもみられ、労働ボランティア活動への需要は減少傾向にある。今回はそのことを踏まえ、労働的なボランティアを水山養殖場での活動を1日に限り、農地支援や教育支援といった大学の特徴を生かしたボランティア活動を中心においた。

今回の活動も、前回同様、学生諸氏はしっかりと自己管理を行い、病気にかかったり怪我を負ったりした者は一人もなかったことは幸いであった。また、各自自覚した行動をとり、京都大学生として恥ずべき行動もなかったことは、学生諸氏の真摯な活動の結果である。

なお、2014年5月15日にフィールド科学教育研究センター第1会議室において今回のボランティア活動の報告が参加学生により行われた。

第6回京都大学学生ボランティア引率者代表
フィールド科学教育研究センター 教授 徳地直子

2. 参加者

労働ボランティア(25名)

氏名	学部／研究科	学科／専攻	回生
岩岡 史恵	農学部	森林科学科	3
麻植 文佳	総合人間学部		2
岡田 和仁	法学部		1
改森 実奈	法学部		2
木野 結	文学部		2
桑原 修三	農学部	森林科学科	1
龔 雨軒	教育学研究科	教育行政専攻	M2
斉藤 侑奎	法学部		2
佐藤 あさひ	農学部	森林科学科	4
砂原 恵海	法学部		1
関村 光代	工学研究科	建築専攻	M2
高木 駿	薬学部	薬科学科	3
高田 晃児	農学部	資源生物科学科	2
武田 翔理	法学部		2
谷頭 慧	教育学部		1
谷崎 佑磨	法学部		3
所 歩美	教育学部		2
中尾 祐貴子	農学部	森林科学科	2
中本 天望	法学部		2
西山 大悟	文学部		2
PIMOLPAN TIRANGKUL	法学部	特別聴講学生	4
福田 健太	農学部	地域環境工学科	1
山岸 充	総合人間学部		4
山部 沙織	文学部		4
山本 大輔	理学部		1

引率(4名)

氏名	所属・職名
徳地 直子	フィールド科学教育研究センター教授
牛田 俊夫	農学研究科等事務長補佐(フィールド研担当)
林 大輔	センター技術職員(芦生研究林勤務)
大川 千船	センター技術補佐員

3. ボランティア活動内容

17 日(月)

6:30 京都大学理学部正門前(今出川通り沿い)集合

7:20 出発(学生1名遅刻のため出発時間を遅らせる)

7:43 京都東 IC にて名神高速道路に乗る

8:28 多賀 SA にて休憩

8:40 多賀 SA を出発

8:56 米原 JCT にて北陸自動車道にのる

10:50 徳光 PA にて休憩

11:00 徳光 PA を出発

バスレクを行う(ビンゴ大会と自己紹介)

13:05 名立谷浜 SA にて昼食休憩の予定であったが工事中のため次の SA へ

13:40 米山 SA にて昼食休憩を取る

14:18 米山 SA を出発

15:20 新潟中央 JCT にて磐越自動車道にのる

16:41 磐梯山 SA にて休憩

16:55 磐梯山 SA を出発

17:20 郡山 JCT にて東北自動車道にのる

19:35 一関 IC にて一般道におりる

19:43 一ノ関駅にて参加学生 4 名合流、引率教職員 2 名が下車(現地での少人数の移動手段としてレンタカーを借りるため。)

21:30 からくわ荘に到着

21:45 からくわ荘にて夕食

22:15 ミーティング開始

0:00 一旦解散(必要なグループは残って打合せ)

18 日(火)

7:30 朝食

8:40 宿舎出発

9:20 陸前高田市役所 到着

10:10～11:30 久保田 崇副市長の講演

11:40 陸前高田市役所 出発

12:10 お魚いちば 到着(昼食各自)

13:20 お魚いちば 出発

13:40 気仙沼高校 到着

14:00 教育支援 開始

14:00～(17:00):学習支援

14:30～(15:30):講話

15:30～(17:00):座談会

16:00～(17:30):生徒会とのミーティング

17:30 :片付け開始

18:00 :完全撤収・出発

18:30 セブンイレブン気仙沼唐桑町店
18:50 宿舎到着・夕食など
20:30 ミーティング(教育支援の反省会、次年度への引継ぎ体制について)
22:00 徳地先生を気仙沼駅へ迎え(林技術職員)

19 日(水)

7:00 朝食
8:00 宿舎出発
9:00 陸前高田カモメネット 到着
～12:00 午前の作業(イベント会場整備・花壇の整備)
12:00 昼食・カモメネット代表(後藤さん)のお話を伺う
13:30 午後の作業
15:30 片付け・ワカメの試食
15:45 出発
16:00 陸前高田市見学(希望のかけ橋、奇跡の一本松、八木澤商店)
16:55 陸前高田市出発
17:45 宿舎到着
18:00 夕食
19:00 馬場国昭さんへの取材 @からくわ荘 大広間
～21:00 震災当時の津波の様子を収めたビデオを見る。
馬場さん自身の体験や現在の活動、仮設住宅の様子についてのお話をしていただく。
質疑応答
21:17 ミーティング(翌日の予定確認)

20 日(木)

7:00 朝食
8:00 出発(水山養殖場周辺は道路幅が狭いため借上げマイクロバスで移動、途中で昼食用おにぎりと飲物購入)
9:00 水山養殖場 到着、作業場所へ移動
9:30 午前の作業(ホタテの貝殻を紐につける)
12:00 作業終了
12:00 昼食(畠山重篤さんの奥さんからホタテフライとサラダをいただく)
13:30 畠山重篤さんのお話
15:00 ホタテ・牡蠣をいただく(雨から雪に変わって気温も下がる)
16:00 終了、宿舎へ移動(途中でお疲れ会用に飲物等を購入。雪が次第に激しくなり積雪し始める)
16:30 宿舎着、入浴等
19:00 夕食
20:00 スタッフ等による翌日の行程打合せ(積雪のため各所で通行止めの情報、翌日の計画していた気仙沼大島での活動は、徒歩及び自転車での移動となることから、積雪により活動困難と断念し、代わって津波被害の状況が展示されているリアス・アーク美術館に変更)
21:15～23:15 加藤拓馬さんご一行による講演会 @からくわ荘 大広間
23:30 お疲れ会
0:00 停電(積雪による送電線切断による)、適宜散会

21 日(金)

7:00 朝食

9:00 荷物搬入(復路バスの連続運行時間制限のため借上げ中型バスで移動)

9:50 出発(お風呂の準備も持って中型バスへ)

10:30 階上地区・岩井崎(潮吹き岩・龍の松)の見学

12:30 昼食

14:00～15:30 リアスアーク美術館

16:00～17:00 南町紫市場(お買い物)

17:30 フェリー乗り場(エースポート)近くに集合

2 グループに分かれて、亀の湯(入浴)と南町紫市場(夕食)に向かう

(職員 2 名はレンタカー返却のため別行動となる)

20:00 気仙沼出発、帰学へ

21:00 一ノ関駅に立ち寄る(参加学生 3 名 現地解散、レンタカー返却の職員 2 名と合流)

21:10 一ノ関 IC から東北自動車道に乗る

23:30 安達太郎 SA 着

23:50 安達太郎 SA 発

22 日(土)

3:10 名立谷浜 SA 着

3:20 名立谷浜 SA 発

5:00 小矢部川 SA 着

5:10 小矢部川 SA 発

7:15 賤ヶ岳 SA 着

7:50 賤ヶ岳 SA 発

9:30 京都大学到着

4. 参加学生による活動報告

第6回京都大学学生ボランティア報告書

平成26年5月15日(木)

作成 第6回京大学生ボランティアメンバー

(1)はじめに

第6回京都大学東北復興支援学生ボランティア(以下、京大ボランティア)の実施にあたり、多大なご支援を賜り厚く御礼申し上げます。おかげさまで大変実りの多い活動となりました。私たちは活動日の夜にミーティングを行う中で、各活動で良かった点、反省すべき点をメンバー間で共有してきました。以下において、簡単な形ではありますが、ご報告申し上げます。

(2)労働ボランティア各担当からの報告(活動内容報告・課題反省など)

(2-1)教育支援 担当

【当日の流れ】

13:40	気仙沼高校 到着
14:00 まで	打ち合わせ 先生への挨拶(天野先生 他)
14:00～(17:00)	学習支援 開始
14:30～(15:30)	講話 開始
15:30～(17:30)	座談会 開始
16:00～(17:30)	生徒会ミーティング 開始
17:30	片付け
18:00	完全撤収

総括

今回の教育支援に関しては、先遣隊(3月4日)時にいただいた気仙沼高校の担当教諭の要望に沿う形で、講話、学習支援、座談会、そして、生徒会とのミーティングを組み合わせで行った。当日において一部、当初の打ち合わせ(予定)と違うタイムスケジュールとなっていたため、序盤は多少の混乱も見られたが、取り組み内容については全体的に満足のいくものであった。次回以降、大学公式の形での派遣が未定であるため、これまで築き上げてきた気仙沼高校との関係をどのように継続させるのかが課題である。

講話・学習支援・座談会

◆背景

三陸沿岸地域には震災前から大学・短大がなく、気仙沼の高校生が大学生と交流する機会は少ない。気仙沼高校も地域の進学校ではあるが、全国レベルとしてはごく普通の公立高校である。また、大学受験のための予備校も、超難関校向けのものはあるものの、それ以外の生徒が通える塾・予備校はないため、校外で模試を受けるときは仙台まで行くとのことである。以上のことに鑑みても、大学進学という選択肢をイメージできない生徒が多く、そもそも「大学」とはどういうところなのか、何を学べるのか、「大学生」とはどんな人か、「難関校」に行くにはどのように勉強すれば良いのかなど、大学生が生の声を伝える機会を提供することは有意義であると考えられる。

◆活動について

(講話)

国数英を中心に、難関大に入るための学習法(使用教材・成績表・模試結果を含む)、学習習慣

(部活等との両立を含む)、模試・定期テストの活用法、スランプの克服などに関する「具体的な」お話と質疑応答を行う。時間は1時間程度、「上位層」の1年生30～50人は必ず参加する。

(学習支援)

家庭教師のような形で、「1対1」あるいは「1対2」で春休みの課題を見ることになる。春休みの課題は、チェックノート数学Ⅰ・Aと英語の教科書Crown。時間は特に設定していないので、15時を過ぎても必要があれば見る。10～20人が参加する予定。

(座談会):

講話の後に開催する。部活等がなく、さらに話が聞きたい生徒が中心に参加予定。(事前に依頼すれば、クラス等で告知すること行われるので、座談会から来る生徒もいるはず)高校生活・大学生活など、何でも気軽に聞いてもらえる場を提供することが期待されている。お菓子・飲み物などの用意も忘れずに。

◆良かった点

- ・担当してくださった先生のご理解もあったため、参加学生は比較的多めであった。
- ・ノート、成績表、お土産などに関して、他班からの協力が得られた。

◆反省点

- ・先遣隊(当日の約2週間前)時の要望、その後のミーティングでの決定事項と、当日のスケジュールが違っていた。
→事前は難しいとしても、当日もう少し早めに現地に入り、先生方と最終確認すべきだった。
- ・先生からの要望が多く、こちらが最大限応えようとしたことは評価できる一方、私たちに何ができるのか、何がしたいのかという視点から、主体的に企画を立案し、提案できればなお良かった。
- ・学習支援に関して、生徒が熱心に自学自習するあまり、最初の方に質問受付ができなかった。進め方などをもう少し詰めておくべきだった。
- ・座談会などで、特定の人としか話せなかった。時間ごとに席替え等をするなどの対応が考えられた。
- ・講話の時間が短かった。
- ・学習支援に来てくれた生徒にも、京大飴などのお土産を渡せば良かった。

生徒会とのミーティング

概要:今後の京大と気仙沼高校の関わりについて、「気高×京大通信」やSNSなどの手段を活用することや、気高から現地の写真を提供してもらい京大で展示するなど、話し合いを行う。京都大学からの公式なボランティア派遣が今回で終了する(つまり、次に気高に来ることは未定)ことを踏まえること。

◆良かった点

- ・2年生、1年生の生徒会の学生が来てくれた。引継ぎが行われる際も安心できます。

◆反省点

- ・開始時間に京大生側が遅れてしまった。申し訳ない限りです。

◆今後に向けて

- ・気高×京大通信、NF でのコラボなどで、気仙沼高校と交流ができればと考える。
- ・京大側の体制をどのように整えるのか？
→第6回派遣メンバー有志で「ホヤボーヤ同好会」を立ち上げる。

● 「気高×京大通信」について、(継続させることを前提に、)

- ・京大生側・・・イラスト(アニメ・挿絵)、レイアウトなどを工夫すること、書き手の多様化を図る必要性があることが確認された。
- ・気仙沼高校側・・・掲示場所の変更・増設(図書室前、部活紹介コーナー)、生徒総会での周知、(先生による)朝礼での宣伝などの必要性が確認された。

<内容面に関して>

- ・壁に掛けてあるのを読んでいる人が一定数いることは確か。
- ・1年生にとっては、そもそも大学とは何か、大学ではどのようなことが学べるのか、といったことにニーズがある。2年生以上に対しては、大学情報に加えて、時期ごとの勉強習慣、勉強法、その他(部活との両立、定期テスト・模試の有効利用、一人暮らし)についての記事があると良い。京都についても紹介すると良い。

<今後の対応>「ほやボーヤ同好会」

- ・これまでの編集者・書き手(第4回メンバーと第5回メンバー)から引き継いだ上で、LINE・定期的なミーティングを行い、継続していく。書き手も随時募集する。

※気高新聞(気仙沼高校生徒会が発行する新聞)で、京大学生ボランティアとコラボする手もある。

※書き手にも限界があるので、過去のバックナンバーも適宜利用する。

● 「NF でのコラボ」について

<実現可能性のある企画>

- ・モザイクアート(制作:気仙沼高校生徒会)の展示 ←現在、JR 大船渡線 気仙沼駅に存置中。
- ・パワーポイントを使った気仙沼の紹介(with 気高生)←Skype を使う手もある。
- ・気仙沼の写真を提供してもらい、地図とともに展示する。

(今後)

- ①気仙沼高校生徒会として、1つ Facebook ページを作成する。

↑

気高×京大の Twitter を使って、アドバイス・情報提供する。

- ②京大生側と合わせる形で、Facebook グループページを作成する。

11 月祭出展に向けた事務手続きを開始する(7 月～)

- ③夏ごろまでは、定期的に連絡を取り、実現可能性のある企画を模索する。

9月下旬～10月ごろから、本格的な検討・事前準備を行う。

(Ex. モザイクアートについては、設置先の JR・気高生徒会との協議、運送手段の検討・確保、モザイクアートの状態・修復可能性の有無などを総合考慮することになる。)

※フィールド研からの支援はそこまで期待できないので、公共政策大学院震災復興研究会、みちのく photo caravan とのコラボなども前向きに検討する。

(2-2)カモメネット(農園栽培支援) 担当

◆活動概要

岩手県陸前高田市のカモメネットにて労働ボランティアを行った。陸前高田市はとりわけ津波の被害が大きかった地である。津波によって流出した住宅跡地を畑として再生させるべく、カモメネット代表の後藤和利さん指導の下、男子と女子に分かれて活動した。午前中は、男子は、積まれた土の山をくずしてならず作業を行った。5月に行われるイベントの会場づくりの一環であった。午後からは、男子は、ガラスの破片や大きな石の撤去を行った。女子は、地面を軽く耕すことから始めた。マリーゴールドなどの種を畑一枚分植えた。また耕運機で別の畑一枚分を耕した。昼食後には、後藤さんが、津波の被害を受けた当時の様子を語り始め、皆が聞き入った。遺体の安置所に行っては知人がいないかどうかを確かめて回った日々、体育館に避難した方々がほとんどなくなってしまったこと、就任したての市長が右往左往しているのをみて一喝したことなどを話していただいた。近くの漁港では、めかぶを頂いた。すぐに煮て、後藤さんと一緒に食べた。なお、後藤さんには、花の種、色紙、写真を送付予定。

◆一日の流れ

8:00 からくわ荘 発

9:00 カモメネット着

全員でラジオ体操

9:00 陸前高田カモメネット 到着

～12:00 午前の作業(イベント会場整備・花壇の整備)

12:00～13:30 昼食・カモメネット代表(後藤さん)のお話を伺う

13:30～15:30 午後の作業

15:30～ 片付け・ワカメの試食

16:00 出発

◆感想・反省点

- ・集合場所がややわかりづかったものの、集合時間を事前に確認していたため、現地で長時間待つことは生じなかった。
- ・後藤さんに加え、漁師さんなど、現地の方とお話する時間・機会もあり、学ぶことが多かった。
- ・見晴らしの良い海近くでの昼食(お弁当)が最高でした。
- ・苗を購入する必要があるのか、確認するべきだった。
- ・防寒対策が必要だった。

(2-3)陸前高田市役所訪問 担当

陸前高田副市長講演記録

(質問原稿)

1. 久保田崇 様が陸前高田副市長になった経緯について教えてください。

(回答)

2年半副市長を務めている。もう1年残るので合わせて3年半になる予定。元々は2年間の期限付きレンタルで、2度延長された。京大には阪神淡路大震災の年の1995年に総合・人間学部に入學。大学ではCO₂削減など環境問題に取り組む。在学中は京都議定書があった。環境省を目指したが、官庁訪問をした際、当時内閣府の係長だった武雄市長・樋渡さんと出会い、面白い人だと感じ内閣府に志望を変更した。

内閣府では元北方領土島民のケアをしていたが、麻生さんが「子どもの育成支援法」を作ると言い出したことにより、トップダウンで法律作成チームに入れられた。毎日徹夜で関連NPOと電話でヒアリングしたりできる限りのことはやったが、現場には行けなかった。その後ニート・引きこもりなど若者対策をしていたところ、交流のあった樋渡さんに声をかけられてプライベートで2011年5月26日に一緒に陸前高田に震災ボランティアに来た。街の様子は酷かった。川の上に車が浮いていて、臭いもすごかった。水産加工会社などから流出した魚が腐り、その臭いが街に立ち込めていた。陸前高田市役所は職員300人中68人が亡くなった。市長など市役所の屋上に逃げた人は助かり、生き残った人が今もプロパー職員をやっている。高台にある給食センターを仮の本部に、生死者のリストを作り、壁新聞のような形で貼りだし、避難所100か所への食料の分配を行っていた。分配は市役所をいつも最後にしていた。どこから手をつければいいのか分からない状態だった。

樋渡市長と震災1か月前に赴任した戸羽陸前高田市長が国に売り込んでくれ、副市長に。戸羽さんが副市長から市長になったばかりで副市長はだれもいなかった。陸前高田に縁もなく、地方で働いた経験もないので足を引っ張るだけで役に立てないのではないかと悩んだが、震災で奥さんを亡くされながらも必死で復興に取り組んでいる戸羽市長に頼まれたら断れなかった。自信はなかったが少しでも戸羽市長の力になればいいと思い引き受けた。久保田さんの奥さんは陸前高田に移って半年は大変だった。双子が明日1歳になる。

2. 大船渡市の角田副市長(国土交通省出身)、石巻市の笹野副市長(総務省出身)など、国家公務員として勤務された経験をもとに、被災市町村で働くケースが増えているように思われます。久保田様ご自身におかれまして、国での経験が役立っていると感じること、あるいは、陸前高田で働いていて感じる国とのギャップ、国への要望(不満)などを、可能な範囲でお聞かせください。

(回答)

震災前は県庁や政令指定都市はともかく、国から小さい市に官僚が行くのは珍しかった。震災後はテコ入れのため国から官僚が副市長に派遣されることが多い。普通は国土交通省の人がインフラ整備のために行くことが多い。国で働いているときは国会議員の方を向いて仕事をしていたが、地方では直接市民と話をする機会が圧倒的に多い。政策のフィードバックが速いし多い。国で働いていた時は現場を見られていなかった。山林を買って住宅を建てたいが、1割くらいの地権者が非協力的だったり、亡くなっていたり、関東にいたりして許可を取るのにすごく時間がかかる。特例で法律を作ってほしいと上に言っているが、「財産権がある」と突っぱねられる。国で法を作っている人が現場に行っていないのでギャップが生じてしまう。

3. 陸前高田市が発表している復興計画によりますと、商業ゾーンの整備を前提に、農業・水産業の基幹産業、地場産業、観光産業を通じて、雇用の場の確保・産業基盤の早期復興を推進するとされています。しかし、復興の様子を見る限り、復興が待ちきれずに住民・企業が外部に流出することが予想さ

れ、計画通りに進むのかどうか心配です。また、新規企業立地・集積に過度に頼るのも、地域経済との両立の面で不安があります。この点、陸前高田市役所はどのようなお考えでしょうか？

(回答)

ホタテ、カキ、ワカメの養殖など漁業がメイン。大船渡はサンマ、気仙沼はフカヒレ。漁業復興も大切だが他の産業にも力を入れないと他の街に埋もれてしまう。高田松原再生もちろんやるが10年かかる。そこで、「復興ツーリズム」を行う。観光と防災を足して2で割ったようなもの。津波対策や街が復興していく姿を見て学んでもらうプログラムを作り、パッケージ化して人を呼ぶ。新年度からリクルートじやらんから一人呼んでチームに入ってもらう。

4. 被災地では、地権者との交渉が難航し、用地取得・換地減歩作業が遅れていると言われてきました。ですが、読売新聞3月11日3面記事によりますと、地権者の承諾を得なくとも、工事を始めても良いとする新たな通達が国土交通省から出たことで、陸前高田市役所の担当者が「事態を打開できる」と述べたとのことでした。住まいの再建で遅れを取っていた岩手県・陸前高田市にとって、確かに事態の打開につながるものと期待されます。しかし、後々、住民ともめる可能性が十分想定され、住民への丁寧な説明が中長期的に求められることは否定できません。この点、どのようなお考えでしょうか？

(回答)

山の土を削って運び、その土で土地をかさ上げしてコンパクトな街を作る。被災者の最大の願いは仮設住宅を出てマイホームを建てたいというもの。ダンプカーなら10年かかるが希望の架け橋のベルトコンベア方式でやると2年で済む。津波で流されて上に物は何もない更地だが、土を盛らせてもらうのに2000人に了解を得ないといけない。へそ曲がりの人がダメと言えばそこだけ残して盛らないといけないが、そんなことは実際不可能。手紙や訪問で地権者の了解をとり、それが無理なら通達に頼る。この通達は求めているものの50%程度のもの。

5. 復興計画の柱に「協働で築くまち」を掲げるほか、「再生可能エネルギーの普及促進」「エコシティの推進」「健康と教育の森ゾーンの再生整備」など、陸前高田市から「新たな東北モデル」を発信する強い姿勢が伺えます。久保田様ご自身が提唱される「ノーマライゼーションという言葉のいらないまち」とも関連して、陸前高田市が取り組むことになる先進的事例について、もう少し具体的なビジョンがあれば教えてください。

(回答)

ほかの町と違うことをやらないと生き残っていけない。震災前から少子高齢化・過疎化している。人口の34%が65歳以上、日本全体の65歳以上の割合は24%。日本全体も20年後には陸前高田の水準に追いつく。「ノーマライゼーションと～」＝障害者、子供、妊婦などマイノリティー、弱者を大切にする街づくり。災害時はいつも弱者が逃げ遅れる。障害者は健常者より被害が2倍。(陸前高田は1.4倍)できあがった町ではバリアフリーの実現一つとっても難しいが、陸前高田は0から町づくりをするので可能になる。弱者が訪れやすい街づくりをする。

質疑応答

・政治判断が必要な案件は政治家の性格に頼らざるを得ない？

→官僚は枠組みの中だけ。他は政治家に頼む。国民の話題にならないものは政治家も官僚もサボる。だから風化は困る。

・国が地方より優れている部分は？

→霞が関は腐っていると思っていた。プロジェクトK「新しい霞が関を作る会」に入って改革しようとした。地方は仕事の仕方がずさん。詰めるのが甘い。報連相がきちんとできていない。20代、30代の若手職員から部署を越えて新しい提案が上がってこないのが残念。説明会でも60～70代の長老ばかりが手を挙げる。女性・若者が遠慮。プロジェクトKのメンバーを呼んで、市役所の若手と話し合う場を設けた。

・阪神淡路大震災の経験をどう生かしているか？

→被災者の個人資産形成になる支援はタブーとされていたが、阪神で初めて破った。東北ではそれをさらに拡充した。阪神は直下型、東北は津波で再建法が大きく違う。津波は元の場所に再建できない。高台の確保と元の土地の処分問題、街の力の違い。

・議員立法が理想だと思うがなぜ官僚は嫌がるのか？

→議員立法は5%以下。法律を作るにはテクニカルな手ほどきが必要（「および」と「ならびに」、「その他」と「その他の」では意味が異なるなど）で、素人にはまず無理。今ある官僚が作った法律を議員立法で修正されると、色々な方面に配慮して作ったのに穴をあけられるので嫌がる。

・国と地方のパイプ役として何を意識している？

→パイプ役はあまり比重として大きくない。市長と同じ目線に立つことを一番に考えている。長は孤独な立場。それを埋めたい。相手が欲しい情報が何か真っ先に考えて先回りする。一般的には国からいく副市長は2人目で、1人目は地元の人。陸前高田は一人しかいないので全部フォローする。

・街づくりのやり方としてボトムアップとトップダウン、どちらに主体を置いているか

→どちらも。原案を行政が提示、議員と情報共有しつつ、住民説明会で意見を求めたり（常に発言する人が決まっていて、それだけ採用してもダメ）、アンケートをとったり、関係者に話を聞いたりしている。

・京大生へのメッセージ

→冷たい言い方になるが、被災地のために君たちができることは何もない。復興の実際の役に立つのはゼネコンや専門家の人。でも来るだけで勉強になると思うし、ここまで来る行動力をすごいと思っている。来てくれて感謝している。被災地での経験を次に来るであろう震災の防災に活かしてほしい。将来仕事をするときに、自分の仕事の中で活かしていってほしい。

(2-4)馬場国昭さん講演 担当

● 映像 (約40分間)

(震災直後の映像)

- ・気仙沼の防災センターは山側に位置していたこともあり、行政の防災無線での呼びかけが不十分であった。初期段階の呼びかけは消防団によるもの。南三陸町では海の横に防災センターがあったがゆえに、職員が犠牲になってしまったが、避難指示は早かった。
- ・第2波の脅威のもと、家の屋根や風呂に入ったまま流された人もいた。鉄製の橋ですら、流された。津波が近づいている中でも傍観している人がいることに驚くばかり。
- ・約二時間半で気仙沼は壊滅したことになる。
- ・おそらく燃料タンクが地面に十分固定化されていなかったために、火災に見舞われた。中央公民館の屋上に400人近い人が避難した。寒さと火事と余震に見舞われた中で二日間そのまま過ごした。ライフラインは止まっていたのに、午後六時のチャイムは流れていた。亡くなった人たちの海からの叫びではないかと言われた。実際は、ソーラーパネル発電による非常電源が作動したため。

(翌日の気仙沼・南三陸の映像)

- ・学校側から高台に向かって車で市民館や体育館を目指したが、道路幅が約1mという非常に狭いものであり、一台のタクシー(対向車両)が下りてきたとたん、避難出来なくなった。数十台の車が立ち往生したまま亡くなったとされる。

Cf. 岩手県では、「てんでんばらばら」に高台に上るといふ昔ながらの言い伝えを実行した。

石巻・大川小学校では、先生が生徒を引き連れて避難したものの、避難先が津波の被災を受けた。

←人の子である以上、理性的に判断することは難しい。

- ・陸前高田市は、街の90%が消滅し、三人に一人が犠牲となった。唐桑町でも百人が犠牲になったと言われている
- ・南三陸町では、2〜3分で津波が到達した。母が泣くなか、隣でVTRを撮影していた娘が冷静な対応を心がけていた。このようなことが可能なのだろうか、自らに問いかけてみてほしい。

(唐桑半島の映像)

セブンイレブンの近くの浜にて

命の次に大事な船がなくなるのがつらいと漁師が口ぐちに言っていた。

● 馬場さんのお話

- ・3月24日に、FIWというハンセン病関係のボランティアが最初に入ってきた。自分の復旧・復興のスタートを切った。誰がどこに逃げたか、どうなったかと言っていただけだったのが変わった。
- ・手を振れば応えてくれる故郷はどこに行ったのか？
両親、妻、固定資産税(家)、・・・
今は、「旅人」であり、(カエル塾の)黒板の予定表がある。
- ・私自身、「笑顔」に救われた。「笑顔の無い街」に笑顔を与えてくれたのはボランティアのおかげ。「一瞬の出会い」から生まれるものである。
- ・「花」に救われた。具体的には、ひまわりの種をお願いしますと呼びかけたら、全国の方からお便りを頂いた。様々なやり取りを含め、「花」に救われたことになる。
- ・「音楽」にも救われた。被害者意識を捨てて主体的に復興に取り組むことを条件に、仮設住宅の会長を引き受けたものの、様々な地域から仮設住宅に入居したため、付き合いはほとんどなかった。そんな中、集会場で沖縄民謡が聞こえてきた。皆が興味を持って部屋からでてきたときに、少しずつコミュニケーションをとれるようになった。今では自分の仮設住宅が最も連帯が強い。

- ・4年目を迎えたものの、災害公営住宅に移り住むまでにはあと3〜4年かかる。「今日を生きる」(M・Weber『職業としての学問』に類似の記載あり)で精一杯。
- ・「一輪咲いて咲増える」
宮本匠 防災研特定研究員→第5回派遣→馬場国昭さん←第6回派遣
- ・4年目を迎えた心境・・・「火を灯す存在」であり、「心のコンパス」となる旅人
- ・柳田國男が三陸沿岸の復興が「旅人たちによって満たされた」という言葉を残す。明治から復興は旅人からなされたというわけである。今で言うボランティア。『雪国の春』『三陸津波』は必読本。
- ・内面的なワーク(心のケア)といったものが重要とされるが、抽象的なものである。旅人として訪問した上で、地域の人とのコミュニケーションを大切にしたい。
「復興の自慢話をできるか」と現地のひとに怒られる場合もあるが、それは自分自身へのやるせなさ・いらだちが原因で言ったのであって、ボランティア(学生)にむけて言ったわけではない。

● 質疑応答・その他

Q. 阪神大震災の時は、被災者が体験談を話すのは震災直後から5年ぐらい経過してからであった。なぜ、馬場国昭さんは、この時期から「語り部」をなさるのですか？

A. 「語り部」だとは思っていない。私自身のさびしさと、旅人の洞察力・エネルギー、優しさ・思いやりに触発されたところが大きい。次のステップに向けた希望ともなっている。

● 海に近いほど逃げる(それゆえ助かる)

海が見えることは直感的に逃げることにつながるはず。

(参考)「津波」の語源・・・「津」(港の入り江)に来る「波」という意味

「三陸」の語源・・・陸奥、陸中、陸前という3つの陸という意味

● 「震災ありがとう」

この言葉にたどりつくまでに2年半かかった。失った過去と失った友達は二度と戻らない。いくら振り返っても戻ってこないが、それならば、「本当の芸術というものは人間の破壊と自然の破壊の無の中から生まれる。」という言葉にもある通り、新しい人生、一つの自分の芸術作品を作っていくしかないだろう。そうでなければ前には進めない。そして、それには旅人の支えが必要。震災があったからこそこういった出会いがあった。被災された方もおそらくは、そう思っているはず。

● 欲しいのは絵はがき。

(2-5)加藤拓馬さん 講演担当

<前提>

20時～:加藤拓馬さん一行がお越しにならず、谷崎が一本電話を入れる。大雪の影響もあり、道路が混雑しているとのこと。学生間でミーティングを行い、明日の予定を確認することに。それでも時間があるので、宿舍の費用清算も行う。

20時30分頃:からくわ荘の近くで脱輪したとの情報を得る。ボランティアメンバーが助けに行く。

21時過ぎ:加藤拓馬さん一行がからくわ荘に到着。ストーブで暖まっていたいたうえで、講演会をスタートさせる。

- 22 時半ごろ:お疲れ会をスタートさせる。加藤拓馬さん一行にもご参加いただく。谷崎より、京都大学総長賞の報告があったが、他のボランティアメンバーより、「逆サプライズ」を受けることになり、驚きを隠せなかった。
- 23 時過ぎ:大雪で樹木が送電線を切断し、唐桑半島一帯が停電に見舞われる。それでも、ろうそくとガスストーブをお借りして、お疲れ会を続ける。

<講演内容>

①東北との出会い(講演者:加藤拓馬さん)

- ・東北:支援の対象から、「可能性のある、関わりたい場所」へ
- ・阪神大震災の経験
- ・早稲田大学学生時代のボランティア経験(中国におけるハンセン病療養所での作業)
ハンセン病、ボランティアを知らずに、現地に飛びこむことに。現地の人との出会い・交流が楽しいあまり、ボランティアに行ってきたと言うことに抵抗感があった。
- ・西尾教授(?)のボランティア否定論に触発される。「ボランティアとは、与える⇄受けるの関係ではなく、心の距離を示す言葉である」「単一ものさしでは測れない豊かさ探し」
⇒ボランティアを超える可能性を、人との出会い・学ぶことにあると考えるようになる。
- ・3月21日、FIWC(海外学生ボランティア団体)の一員として、被災地入り。内定先の企業に入社直前であったが、先輩からの一言で、入社辞退・東北滞在を決める。

②まちづくりについて(講演者:加藤拓馬さん)

- ・まちづくりに必要なもの(3要素):「よその」「わかもの」「ばかもの」
- ・20代~30代の世代は、仕事の関係上、外出することが多く、支援対象とされない傾向にあった。(Cf. ことも支援、高齢者支援・・・etc)
⇒地元の人(20代~30代、地元の学生)に加え、吉本哲郎(地元学)の提唱する「風の人」(外部者)による客観的な視点を持ちこんだ街づくりを実施することに。
- ・「ないものねだり」から、「あるものさがし」へ!
「風の人」が地元住民に質問→まとめ・発表・住民への配布→日常生活に役立てる」のサイクルを確立させる。
- ・背景には、東北特有の他人任せ(行政依存など)構造から脱却し、主体性をもって、再発見・議論を喚起することを意図していたことが挙げられる。
- ・住民自治:「愚痴から自治へ」ex. 勉強会、自助共助の重要性・意識喚起
- ・河川清掃後に、県庁で勤務する職員の事例
→メディアが特集することで、街づくりに良い影響を与える。
- ・(最後に、)東京・仙台といった都市部が、気仙沼をはじめとする地方部を追いかける時代が必ず来る。また、震災ということをきっかけに、新しいことを何でもできる環境が気仙沼・唐桑にはある。

③からくわ丸の活動紹介(講演者:梶原政芳さん、立花淳一さん)

- ・「よその」よりも地元のことを知らない悔しさと興味
→からくわ丸に携わるようになる。
- ・「街歩き」の実施
「風の人」(外部者)は、WAVOC(早稲田大学ボランティアセンター)の他、からくわ丸学生部隊から募集すること。土日に街歩きをするので、参加してもらいやすい。
- ・「GOTEN」グッズの作成・販売

- ・地元の子供たちを対象とした海釣り の実施
→「海と生きる」をスローガンとする気仙沼で、海離れが起きていることを心配している。
- ・愛着が高まれば、Uターン率が高まる。将来は、地元で貢献してほしい。
- ・「縦社会」と興味ない という連鎖(「見えない壁」)をいかに断ち切るのか？
→よそものなりに向き合い語らう win-win 型の街づくりを目指している。

④質疑応答

- Q. 愛着があるとしても、雇用の関係で、外部に出ていくことも考えられる。この点についてどのように考えているのか？
- A. 地元の中小企業では一定の求人(倍率)があるが、イメージ戦略の面で負けているところがある。「かっこいい漁師」などがあってもよいと思う。また、パソコン一つあれば都市部で働かなくてもよい取り組み、山里鍋合戦、等の事例もあるので、そのようなモデルケース・成功事例を増やしていくことが重要。
- Q. 街づくりのスパンはどれくらいなのか？街づくりが成功するとはどういうことをいうのか？
- A. 基本的には 5～10 年を考えている。「街づくり」が成功したかどうかについては、「住民が生き生きしている」という基準があるとされるが、抽象的で判然としない。一つの基準としては、「視察してもらえ」ことが挙げられるのではないかな。その他、気仙沼ではまだ「まちづくり条例」が策定されていないので、出来れば携わりたい。
- Q. 街づくりなどに携わる上で心がけていることはありますか？
- A. コンビニエンスストアがコンビニエンスでないぐらい、人との距離が近すぎる場所がある。「縦社会」に類似する構造もある。地元の方から、一つ一つ教わってきた。社会人としてのマナーもそこから学んだ。単に支援するという立場・姿勢では反発されることになりかねないので、この地域のことを学ばせていただく心構えが大切。そうすれば、多くのことを教えてもらえ、良好な関係を築くことができる。人間修行の場でもある。

(2-6) 水山養殖場(ホタテ養殖作業)担当

“The sea is longing for the forest, the forest is longing for the sea.”

◆目的

「森は海の恋人」運動発祥の地で、海での作業を行うことで、両者のつながり、また、牡蠣の養殖業に命を懸ける人の思いを理解する。

◆活動場所

水山養殖場:ホタテ貝を紐につける作業、畠山さん講義

◆準備物

長靴、ゴム手袋、ゼッケン(以上はフィールド研より貸与)
汚れてもいい服
おにぎりとお茶(コンビニエンスストアに事前発注)

◆一日の流れ

8:00 出発(水山養殖場周辺は道路幅が狭いため借上げマイクロバスで移動)
9:00 水山養殖場 到着、作業場所へ移動
9:30 午前の作業(ホタテの貝殻を紐につける)
12:00 作業終了
12:00～ 昼食
13:30～ 畠山重篤さんのお話
15:00～ ホタテ・牡蠣をいただく
16:00 終了、宿舎へ移動

◆感想・課題など

- ・時期と天候の関係で、海での作業に終始したが、畠山さんのお話を聞いたり、牡蠣やホタテをごちそうしてもらったりできてよかった。
- ・おにぎり、お茶の注文がありがたかった。
- ・ホタテ貝をさわる作業において、ゴム手袋が有効であった。
- ・お土産の用意ありがとうございます！
- ・畠山さんとの事前連絡の報告、勉強会の知識が役立った。
- ・前日のミーティングで、「学ばせていただく」心構えを共有できたことも良かった。
- ・レモン(果汁)を持参すると良い。

畠山重篤さん講演のまとめ

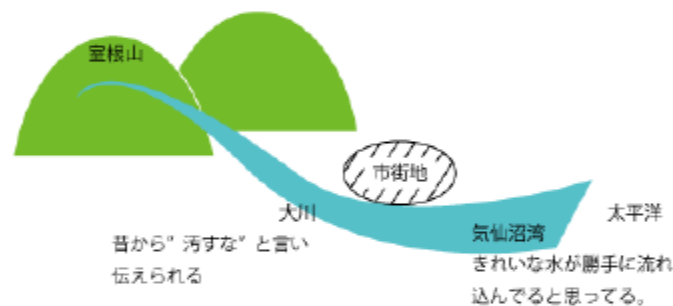
文責:高田晃児

森里海連環学

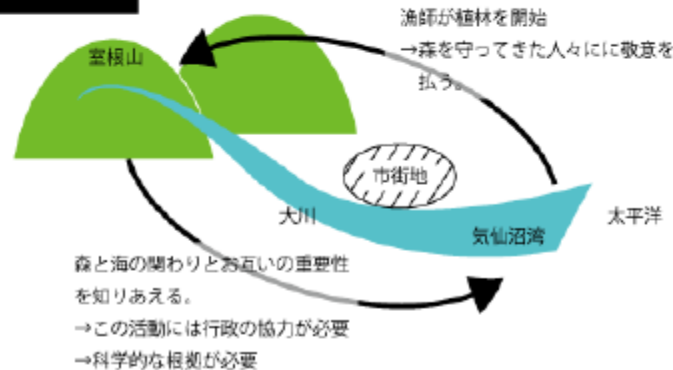
学問体系では自然を見る際、海のことは海だけ見る、山なら山だけ見るというような非常に限定的な捉え方をしていた。しかし、自然はつながっておりトータルで見ることが望ましい。大きな視点で自然を捉えるようとする意識が「森里海連環学」の背景にある。この先進的な試みを京都大学は注目した。

平成以前の地元の人も上のような部分的な見方しかしておらず森と海の関連、重要性などお互いに知ることなかった。そんな時太平洋が赤潮で汚染され漁業、養殖が甚大な被害を受けた。漁師のなかで汚れた海をきれいにしようとする人が現れ、その対処法を川、森にまで目を向けて考えだした。漁師が木を植えることで森林周辺の人も森について考え、海についても考えてくれるのではないかということで平成元年漁師による植林が始まった。

平成元年以前



平成元年以降



この活動は世の中の風潮として「環境」が考えられ始めていたこともありメディアに売り込んで周知を図った。この活動を推進するためには行政の協力が不可欠であり、それを要請するには科学的な根拠が必要であった。

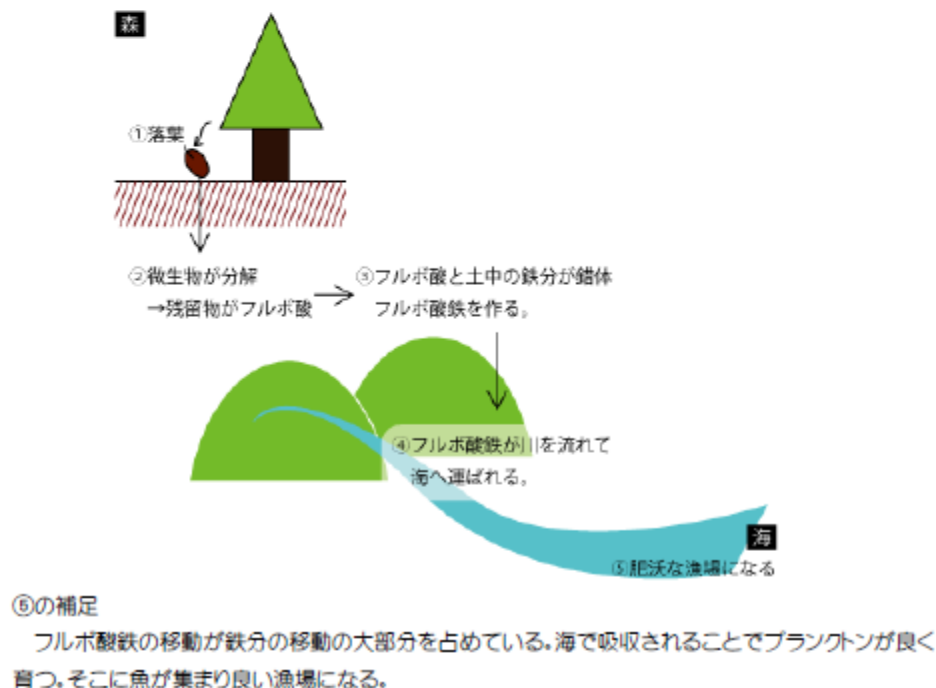
鉄の重要性

窒素・リン・ケイ酸などの化合物を体内に取り込む際に鉄が重要な役割を持つ。次のような実例がある。

- ・粗悪な土地でも大麦が育つのは大麦が鉄分を溶かして体内に取り入れる仕組みを持っているからであり、その遺伝子をほかの植物にも応用して期待する結果が出ている。
- ・宮沢賢治が赤土を鉄分の供給剤として使用した。
- ・黄砂の時期になるとプランクトンが増える。(黄砂に含まれる鉄が海に鉄を供給している。)※1
- ・揚子江の上流には重慶という鉄鋼業の街があるため良質な河川であった。
→ダムを建設してから鉄分がダムに溜まり海まで運ばれなくなった。
- ・日本でも中国地方はたたら製鉄のおかげで漁業が栄えた。
- ・汽水域(淡水と海水が混ざるところ)は良い漁場になる(※2)

※1 1980年代 John Martin らは海中の鉄の量がプランクトンの発生量を決めていると発表した。アラスカ湾は HNLC(High Nutrient Low Chlorophyll)海域と呼ばれ、窒素やリンなどの栄養が豊富であるのにプランクトンが少ない場所である。これが維持されているのも鉄分量が少ないためである。

※2 汽水域が良い漁場になる理由。森と海のつながりや森里海連環学的重要性も同時にわかる。



(2-7)リアスアーク美術館 訪問記録

<目次>

- 訪問経緯
- 展示内容(概要)
- 最後に

i. 訪問経緯

現地最終日(21 日)の午後は、当初、気仙沼大島を訪問したのち、南町紫市場、亀の湯に訪問する予定であったが、積雪のため徒歩かレンタサイクルしか交通手段のない気仙沼大島での活動は断念し、マイクロバスが宿舎に来る時間が遅れることが予想されたため、大幅に企画変更することにした。

具体的には、

階上地区→ 岩井崎(潮吹き岩・龍の松)→(昼食)→ リアスアーク美術館→ 南町紫市場(お買い物)→ フェリー乗り場(エースポート)近くに集合→ 2グループに分かれて、亀の湯(入浴)と南町紫市場・復興商店街(夕食)→ 気仙沼出発→ 一ノ関駅に立ち寄り → 京都に向かう ことになった。

ここでは、リアスアーク美術館を訪問した記録を簡単にまとめておく。

ii. 展示内容(概要)

大きく分けて、東北の郷土・歴史・文化の展示コーナーと、震災・災害史の展示コーナーがあった。以下、後者に焦点をあてて、展示内容を概説することにする。なお、当美術館内は写真撮影を禁止していたため、写真の記録は残っていない。あくまでも、個人レベルの記録(メモ)に基づくものである。この点、ご了承ください。

第1部～個人と社会、日常と非日常～

- ・個人と社会:社会に生きる私達の責任とは、未来を考えること、伝えることである。そのためにも、何ができるのか?から、すべきことは何なのか?と問いなおすことが重要。
- ・過去としての今は、未来を救う地域の歴史でもある。
- ・被災者避難所に、第一義的責任があるが、主体性をもたせるとともに、弱者にさせないことが大切。
- ・「非日常」と「日常」:束の間の過剰なプラス(イベントなど?)は時としてマイナスに働くこともある。「非日常」においても、何もないこと(「すごす復興」)が大切であり、後に「日常」となる新しい環境・価値観につながる。

第2部～自然災害と文化、記録と再生～

- ・自然災害→(日々の暮らしのあり方)→災害 という構図
- ・「文化」・・・単なる人・行為・ものではなく、積み重ねられた人々の記憶そのものである。それゆえ、「文化」が消失することは、自然災害ではなく、2次災害・人的災害である。
Cf.「文化財」:便宜上適示するのに用いられる代名詞である。≠「文化」
- ・「文化史」「津波文化史」を継承することの大切さ。防災教育だけでは不十分。
- ・公園があった場所に仮設住宅が建設された。学校のグラウンドなど、子どもの遊び場が減少している。
- ・開発の裏では、津波が忘れられていた。
- ・かつて埋め立てた場所を取り返すのが自然である。
- ・風景、家:アイデンティティの形成に寄与するとともに、精神・居処としての日常風景
- ・廃校:こどもたちのにぎわいが失われた。
- ・情報:「想像力」をもたらすもの。
- ・記録と再生～「石碑」と「語り部」の関係 再生方法の更新が重要!
- ・神社の存在
- ・伝える:「客体に認識される可能性」+「伝える意志」
- ・噂:死者との距離

第3部～現代の防災・減災システムの限界・課題～

- ・火災の可能性があるので、避難場所・避難経路の再考、新設が必要となる。
- ・平成大合併の弊害 旧唐桑町などへの支援・対応が不十分？
- ・ラジオ / インターネットなどの活用
- ・携帯電話の活用～電波中継車の重要性～
- ・海が見えないことの危うさー防潮堤問題・反射津波に注意！
- ・防潮林の危うさー 流されると危険物にもなる
→衝撃を和らげるものであり、ある程度陸に引き入れたうえで、抵抗するべき。
- ・線路の恐怖
- ・河川整備の必要性
- ・建物は一般に、内部からの水圧に弱い。
- ・コミュニティー論とプライバシーの問題
- ・「絆」が使い古される風潮
- ・「勇気づけられた」：暮らしを取り戻している姿を見ているだけにすぎないのでは？
- ・元気ー外面の裏で、内面の問題が見失われる？
- ・仮設住宅、仮設商店街という「記号」←メディアが取り上げる裏に、自力再建者が忘れられる？

第4部 <3/11>から学ぶべきこと～新たな防災・減災システムの構築に向けて～

- ・ガレキではなく、「被災物」と呼ぶべき
- ・段階的に盛り土をすること or 鉄筋コンクリート支柱＋建築物＋遊水地 の複合防災
- ・遠いところではなく、高いところへ！
- ・原点回帰：津波災害ー高台移転 cf. 直下型地震ー現地再建
- ・嵩上げー必ずしも土砂でなくてもよい？ 鉄筋 / 樹脂筋コンクリートを代替使用可能。
- ・「復興支援観光」ー地域を支える力となる。
- ・「獲得された当事者性」：第3者と当事者の相対性
- ・重油（燃料）の処置について タンクはしっかりと固定するべき
- ・自動車社会における災害の複雑さ、輸送システムの脆弱性
- ・代替ルート、命の道の整備に必要性
- ・リアス式海岸特有の（津波）災害への対応
- ・現場：立体・基準（スケール）がなく、上下反対の場合もあるため、距離感・スケール感が不明。→キー要素がないため、記憶が困難になる？
- ・悪臭、遺体の表現方法を工夫すること。
- ・可視化の有用性。
- ・恐怖ー具体性な者に対して、対処方法を考えること。

iii. 最後に

今回は急な企画変更であったために、参加者が事前にリアスアーク美術館について調べることは皆無に等しかった。（かろうじて、先遣隊時の訪問が活用できたかどうかである。）また、思っていたことではあるが、90分という滞在時間ですべて見回すことはおよそできなかった。今後、同様の企画を考えると、120分を一つの目安とすることを提言したい。また、何かしらの「課題」（例えば、自分の気に入った展示物を3つ挙げ、感想・意見を書いてもらう）を課することによって、各人の思いを共有すれば、より理解が深まったかと考える。

とはいえ、被災物・写真を単に鑑賞するにとどまらず、学芸員の解説を通じて、体系的に理解させようと試みるリアスアーク美術館を現地最終日に訪問することを通じて、災害史・震災復興の振り返りができたことは大変有益であった。

(3)おわりに

京大ボランティアをきっかけとして初めて東北を訪れた参加者も多く、各活動を通してそれぞれが貴重な経験を積むことができました。これは、学部や学年を超えた学生が集まり、主体的に企画して行う本活動ならではのことだと考えます。このような「総合型」ボランティアの実施にご理解とご支援をくださっている京都大学ならびにフィールド科学教育研究センターに対して、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

5.今後のボランティア活動に関する課題、留意点(フィールド研)

(1) 学生による企画について

毎回学生が自主的に企画を行い、ボランティア内容を決めているが、今回もその形を踏襲した。今回の派遣2週間前の3月4日から3月6日に先遣隊として、これまでの参加経験のある学生5名、職員2名で前半を気仙沼市周辺の下見、後半に仙台市で開催された震災3年目を迎える学生サミットに参加した。気仙沼高校では学習支援における担当教諭や生徒のニーズをお聞きし、派遣本隊に参加する学生へ課題を連絡でき準備に役立てられた。また、陸前高田市の復興状況を事前把握したり、新たな訪問先として「からくわ丸」へ出向いて講演依頼を行ったり、リアスアークミュージアムを訪れて気仙沼市周辺の震災当時の被害状況が多くの写真や資料を見学し、その被害の甚大さを知ることができ、派遣本隊のスケジュール作成に大いに役立てられた。

こうした先遣隊や過去の参加者からの情報を基に、本隊参加学生は班に分かれて実施計画を作成していった。しかし、現地と京都大学は遠く離れており、想定できない課題も多くあったであろうが、被災地の方々と真摯に交渉し、当日を迎えられた。これらは個々の学生に、大学では経験できない交渉はコミュニケーションのよい訓練になったと考えられる。京都大学の伝統である自主独立を何歩も進めた経験ができたといえるだろう。

(2) 今後の活動について

京都大学ボランティアの支援は、東日本大震災の被災地域にほとんど繋がりがなかった京都大学のなかで、フィールド研が社会連携教授を任命していた NPO 法人「森は海の恋人」代表の畠山重篤氏の活動拠点の気仙沼市舞根が大きな被害を受けられたため、この地をベースに京都大学学生ボランティアを派遣しようとしたことから端を発している。参加学生の熱心な働きかけにより、松本総長のご理解を得られて全学経費により年2回の京都大学学生ボランティア派遣として平成23年度から25年度までの第6回を重ねてこられた。全学的な取り組みとしてスタートし、フィールド研も当初は10年間の継続の必要性を謳ったが、他学部からの協力もほとんど得られず、募集から引率までほぼすべてをフィールド研が行ってきた。

一方、フィールド研の教員数も少なく、学生ボランティア実施時期の夏休み及び春休みは学生実習と重なり、実際に担当できる教員は限定された。希望者を募ったり、指名も検討したが実現できなかった。準備等に当たる事務職員も僅かのため、こうした業務に専念することにより本来の業務に支障も懸念された。このため第6回の派遣を前にフィールド研教授会で議論し部局として窓口の継続中止を決定し、翌年度の全学経費要求は行わないこととした。

この結果を第6回の学生ボランティア活動報告会で集まった学生たちに伝え、平成26年度からはフィールド研は窓口とはなれず予算要求もしないので経費補助も出来なくなり、京都大学として学生ボランティアの派遣は困難となった。

大学からの協力助成がなくなったが、有志の学生が「ほやボーヤ同好会」としてサークル活動のような取り組みで、東北の復興状況を11月祭などで学生に伝え、学習支援に訪れた気仙沼高校へ気高×京大通信(学生新聞)で京都大学の学生生活や京都の情報等を紙面での交流を続けている。

(3) ボランティア活動の支援体制について

これまで京都大学の学生はこうした災害復旧に向けた組織化されたものがなかったように思われる。これは阪神淡路大震災で大きな被害のなかった京都という土地柄からかどうかは分からない。学生ボランティアに参加する学生の動機はさまざまであろうが、実際には京都大学が主催し往復バスと宿泊場所を準備するため、気軽にボランティアに参加できるようである。しかしながら、現地へ行く前に京都大学の学生として何が出来るかを考えながら、班ごとに事前調査や準備をして、現地で初対面の被

災地の方々と真摯に向き合っていた。こうした東北での活動に異議を覚え、多くの学生がその後に有志を募って再び訪れている。

京都大学の学生は、ボランティア活動をずっと続けることはないとしても将来大きな責任ある立場に立つことが予想される。そのような指導的な立場に立つ人間形成を任されている中で、被災地を実際に体験し、現場の方のお話を伺う機会を与えられるというのは非常に有意義であると考えます。実際、一度被災地に行ってみたかったというレベルの学生が、その後、馬場さんに会いに、あるいは自分たちが植えた花壇や作物を被災地の方と確認するために再び被災地を訪れている。現場の方の側に立った見方ができるようになり、これが将来学生の大きな力になることは間違いない。

このような活動が学生に与える影響を追跡することは、教育的価値も、学術上にも非常に意義深いものであると思われ、学内の教育・人間形成関連の部署の対応が望まれる。今回の活動においても、事前に他部局にも問い合わせたが、対応が可能な部局はなく、京都大学としての支援と対応が必要であると痛感しており、全学として何らかの支援をお願いいたします。

6. 記録

(1) 記録写真



久保田副市長の講演

からくわ荘での夕食

久保田副市長の講演

気仙沼高等学校での講話



気仙沼高等学校での学習支援

座談会



気仙沼高校生徒会とのミーティング



カモメネットでの作業風景



カモメネット代表 後藤さんのお話



馬場国昭さんの講演



ホタテ養殖作業



畠山重篤さんの講演



からくわ丸の方々の講演



奇跡の一本松



希望のかけ橋

八木澤商店



龍の松



岩井崎



からくわ荘



集合写真



集合写真



総長賞(賞状と記念品)

(2) 第六回学生ボランティア派遣の説明会用チラシ

<事前説明会>

森里海連環学で東北復興を！



第6回京都大学学生ボランティア派遣説明会

京都大学では、春休みを利用して東日本大震災で被災した東北地方の復興をお手伝いする学生ボランティアを派遣します。事前にボランティアの支援内容を話し合ってもらうために、募集開始前に説明会を開きます。この説明会では前回までのボランティアに参加した学生より、これまでの活動の経緯が紹介されるとともに、今回の活動内容を検討します。第6回ボランティアに参加希望の学生は、必ず説明会に参加されますようお願いいたします。説明会に参加できない場合は、下記問い合わせ先にご相談下さい。



2013年9月の学生ボランティアの様子

写真左：高校生への学習支援 写真右：牡蠣養殖作業の補助
これまでのボランティアの様子は、ウェブページを参照。

ボランティア期日(予定):

2014年3月17日(月)～22日(土)

活動場所: 宮城県気仙沼市



内容: 労働ボランティア: 学習支援, 養殖業補助, 環境整備など

研究ボランティア: 期待される調査は、森林資源調査、湿地を含む河川から海までの水質調査など
(研究ボランティアを希望する方は、ご自身で研究計画を立てられた上で、下記の問い合わせ先にご相談ください)

募集人数: 労働ボランティア 20～25名、研究ボランティア 若干名

募集対象: 京都大学の学部学生・大学院生・研究生等

説明会日時: 2013年12月17日(火) 18:30～20:00

説明会場所: フィールド研会議室

(吉田キャンパス北部構内 農学部総合館2階 N283)



募集期間(予定): 2014年 1月 7日(火)～14日(火) 17時まで ※先着順ではありません

派遣期間(予定): 2014年 3月17日(月)～22日(土)

募集方法(予定): フィールド研のウェブページよりボランティア申込書をダウンロードして、所属学部・研究科の教務掛に提出してください。申し込み人数が定員を超えた場合、説明会での出席と申込書に記入された志望動機等をもとに、参加学生を選考する予定です。

問い合わせ先: 京都大学フィールド科学教育研究センター

電話: 075-753-6442 (徳地直子教授)

メールアドレス: tokuchi@kais.kyoto-u.ac.jp



<http://fserc.kyoto-u.ac.jp/wp/kesennuma>

森里海連環学で東北復興を！ 第6回京都大学学生ボランティア募集



京都大学では、春休みを利用して東日本大震災で被災した東北地方の復興をお手伝いする第6回学生ボランティアを派遣します。以下の要領でボランティアを募集します。誘い合って東北の復興に出かけませんか。



2013年9月の学生ボランティアの様子

写真左：高校生への学習支援 写真右：牡蠣養殖作業の補助
これまでのボランティアの様子は、ウェブページを参照

期日：2014年3月17日(月)～22日(土)

場所：宮城県気仙沼市

集合場所：北部構内 理学研究科1号館前
：JR「一ノ関」駅(一ノ関までは自己負担)



内容：労働ボランティア【学習支援、養殖業補助、環境整備など】20～25名

ボランティアの内容は、派遣学生によって自主的に検討していただきます。検討会は派遣までに何回か開催しますので、必ず出席してください。また、12月17日(火)18時30分より20時まで事前説明会を開催しますので、申し込みを検討している方は必ず出席してください。説明会に参加できない場合は、応募開始までに下記の問い合わせ先まで相談してください(学生ボランティアの方で個別に情報提供・質問受付を行います)。

研究ボランティア【期待される調査は、森林資源調査、湿地を含む河川から海までの水質調査など】若干名

気仙沼の舞根湾で津波後の環境・生物調査を行っています。研究ボランティアはこの調査活動の範囲の中で行っていただきます。研究ボランティアを希望する方は、ご自身で研究計画を立てられた上で、下記の問い合わせ先にご相談ください。

ボランティア募集対象：京都大学の学部学生・大学院生・研究生等・教職員

ボランティア募集期間：2014年1月7日(火)～14日(火)午後5時まで

※この期間にフィールド研に届いた応募は全て受けつけます(募集人員を超えると選考あり)

ボランティア応募方法：フィールド研ウェブページより、ボランティア申込書をダウンロードして、必要事項を記入の上、所属学部・研究科の教務掛に提出してください。申し込み人数が募集人員を超えた場合、申込書に記入された志望動機等をもとに、派遣学生を選考します。

教職員の方は、直接、徳地教授へご連絡ください。

日程：3月17日(月) 午前7時 北部構内 理学研究科1号館前からバスで出発

(または3月17日午後6時頃、JR「一ノ関」駅にてバスに合流、「一ノ関」駅までは自己負担)

同日夜、国民宿舎「からくわ荘」(宮城県気仙沼市唐桑町崎浜4-1) 着

3月18日(火)～21日(金) ボランティア活動(内容は派遣学生を中心に検討)

3月21日(金) 夜 気仙沼市からバスで出発

3月22日(土) 昼頃 北部構内 理学研究科1号館前着

同行者：京大教職員2～3名

費用：往復バス代、宿泊費およびボランティア保険料は京都大学が負担。

食費(約1万円)のほか学習支援にかかわる飲食費など(数千円)は本人負担。

服装・持ち物：汚れてもよい作業着など、着替え、防寒具、雨具、リュックサックの
ような両手が自由になる荷物入れ、洗面具など。長靴は京大が用意。

応募条件：必ず学生教育研究災害傷害保険に加入しておくこと。

問い合わせ先：京都大学フィールド科学教育研究センター

電話：075-753-6442 (徳地直子教授)

メールアドレス：tokuchi@kais.kyoto-u.ac.jp



<http://fserc.kyoto-u.ac.jp/wp/kesennuma>

(3) 事後報告会に関して

主催: 第6回京大学生ボランティアメンバー

日時: 平成26年5月15日(木)18時30分～20時

場所: 京都大学フィールド科学教育研究センター第1会議室(N283)

- 議題:
1. 今回の活動報告
 2. 成果と反省点のディスカッション
 3. ボランティア活動の今後について

7. 特記事項

・放射能測定の結果

第6回 東北学生ボランティア線量計(H26.3.17-3.22)

学生が携帯していたもの 8～30mSv

職員が携帯していたもの 7 mSv

京都大学フィールド研事務室 10 mSv

8. 謝辞

気仙沼高校では、第2回より引き続き校長の庄子英利先生をはじめとする数多くの先生方のご理解を得て、学生たちも納得できる成果を挙げることができた。また、今回の活動でも、畠山重篤氏、畠山哲氏をはじめとする水山養殖場の方々には色々とお世話になった。そして、紫市場復興商店街・復興マルシェの方、各店舗の方々、カモメネット、馬場国昭氏には、震災時の様子やその後の復興状況を説明していただいた。雪の悪天候の中、学生のために何とか集まっていた加藤拓馬氏をはじめとするからくわ丸の方々、現地の青年活動のご苦労話に加え、深夜まで懇親会にご参加いただきました。また、陸前高田氏の久保田副市長にはお忙しい業務の中、お時間をいただき、学生諸子への対応をいただいた。からくわ荘経営者の佐藤達也氏には、我々の今後の活動の継続に向けたさまざまなご提案をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。